

# しまね読進協 第43号

発行日 平成28年2月19日

発行所 島根県図書館協会読書推進運動協議会部会 (松江市内中原町52番地 島根県立図書館内)

平成二十七年 度

## 島根県図書館協会の主な事業

### ◎読書普及研修会(予定)

「知的に楽しく！ヒラリオハトル」

講師 高見京子氏(東京学芸大学)

浜田会場 三月八日

松江会場 三月九日

### ◎公益社団法人・読書推進運動協議会より表彰

全国優良読書グループ

つくし会(雲南市)

### ◎島根県図書館協会より

読書推進運動功労者の表彰(団体)

・おはなしだんだん(出雲市)

・おはなしペンジャミン(出雲市)

・おはなしボランテニア夢風船(出雲市)

・ダンボの会(大田市)

・おはなしピーンズ(大田市)

### ◎読書体験記の募集

応募数 十二編

入賞 三編

### ◎「この本いいよ！〜島根の高校生・高専生

おすすめの一冊〜」投稿の募集

応募団体 九学校

応募数 百三十九点

### ◎機関誌等の発行・配布

・「しまね読進協」第四十三号

## 西ノ島町の読書普及活動について

西ノ島町立中央公民館図書室

司書 真野 理佳

西ノ島町は、現在、中央公民館図書室を中心に図書館活動を行っています。平成二十四年度に大幅なリニューアルを行い、利用者数、貸出数ともに増えているところです。公民館では、乳幼児、児童を対象にした「おはなしのへや」を開き、多くの方が参加してくださっています。小学校では、読み聞かせボランティアグループによる読み聞かせを毎月二回行っています。今年度は、二つの大きな事業を行いました。

一つは、「幼児・児童読書普及事業」の指定を受け、県立図書館読書普及指導員の江角宏子さんに来ていただきました。保育園、小学校、町の子育てサロンを会場にして、読み聞かせや研修会を行いました。

もう一つは、「しまね子ども読書フェスティバルin西ノ島町」です。県からの委託を受け、中央公民館を会場に子どもたちの読書活動の推進に向けた様々な取組を行いました。

十一月十五日(日)には、講師に雲南市おはなしシェフの小田川美由紀さんをお迎えし、「おはなしレストランin西ノ島町」を開催しました。第一部は、幼児から低学年向けに、手遊びやパネルシアターを交えながら、絵本の読み聞かせを中心に行いました。第二部は、中学年から高学年向けに、ブックトークをしていたいただきました。会場の雰囲気づくりや、小田川さんの引き込まれるような語り口、今までに経験したこと

のない本(絵本)の楽しみ方に、参加した子どもたちも大喜びでした。

その他、島根大学短期大学部教授 岩田英作さんをお迎えした「えーさくおじさんの絵本をめぐる冒険」や、親子読書アドバイザーの秋庭ゆみ子さんをお迎えした「子どもと本をつなぐ読み聞かせ&ブックトーク」研修会も開催しました。

これらの活動を行ったことで、赤ちゃんの時から読み聞かせを始める大切さ、親子で一緒に声を出したり絵をさがしたりしながら絵本を読む楽しさ、家読の大切さを知ってもらうことができました。小さなうちから、本に触れることで、読書習慣は形成されていきます。今回の事業を機会に、子どもの読書活動を中心に、子どもから大人まで、本に興味を持つ人が増えればいいなと思います。西ノ島町にはまた「図書館」と呼べるものはありませんが、小さな図書室から情報発信し、町民、利用者の方の声を受け止め、今回の活動で得たことを生かしながら、今後も人と本をつなぐお手伝いをしていきたいと思っております。





# 読書体験記 入賞作品

## 〈一般の部〉

「喜寿の図書館通り」

田中君代（海士町）



『五二屋傳蔵』  
山本一力 著、  
朝日新聞出版



『いかずち切り』  
山本一力 著、  
文藝春秋

『ジョン・マン』波濤編  
山本一力 著、  
講談社



毎週土曜日になると、昼食の賄いもそこそこエプロンを外し喜寿の私が喜々として出かける先は、町の図書館。今日はどんな本が入っているのか期待も大きく、まず新着本棚を見て、次に一週間で読めそうな一、二冊を選ぶ。後は婦人公論や貸出禁止の雑誌をめくる。冷暖房つき、広く明るい窓から四季折々の田畑が見渡せる絶好の環境である。ついつつと居眠りするところもあるのを目立たない定位置でこれから三時間余り時代小説と再会する至福の時

である。

私は、時代小説が大好きで、作者先行で本を選び、特に山本周五郎や藤沢周平に心酔してきた。池波正太郎の剣豪作もいい。特に藤沢氏の本は読み尽した感があり、時たま映画に出会うと又、読んでしまう。その面白さは、言葉で言い表わせずもどかしくもある。

近年、葉室麟の「蝸ノ記」を皮きりに、言葉の美しさや、凛として武士道に生きる侍や、その真髄をくみ取り力強く支える女人の姿に魅せられた。読みこたえのある文学性の高い作品だと高く評価していた。ところが最近字面は追っているが、心に響かぬ空読みが多くなってきた。背後関係も忘れがちでしっくりこない。きつと齡と共に、読解力も劣ってきたのだろう。又ちょっと難しく飽きてきたのかも。しれない。

今熱中しているのは山本一力作、本との出会いは「ジョン・マン」。作者をテレビで拝顔してから、増々ファンになった。

図書館にあるだけの本は読み漁った。リズムカルで肩がこらないし透明感があり、人物像の明暗がはっきりしているのもいい。「五二屋傳蔵」「いかずち切り」等々、今日も新刊を探して、二冊リクエストしてきた。

海士町は、人口僅か二千四百人、小さな島であるが、島まるごと図書館でどんな僻地でも人の出入りする所には本が置かれ、自由に借り返しできる。私など港で借りて船旅によく利用している。又予算の許す限り希望する本を入れてくれる。この島にこれだけの図書環境が整い、本当に恵まれている。私は借本した時は必ずチラシでカバーし返本時には取るようにし、又読書中は飲食しないこと、菓子屑が入ったり、一点でも染の付いた本は、自分でも読みたいくないから。

さあ、残りの人生、後何年この大好きな図書館に通い、面白い時代小説に出会えるか楽しみである。

『五二屋傳蔵』朝日新聞出版／『いかずち切り』文藝春秋  
／『ジョン・マン』講談社 著者はいずれも山本一力

## 〈児童・生徒の部〉

「大切な命」

森藤里菜（横田高校）



『あなたを産んでよかった』  
マーサ・ベック 著、扶桑社

生まれてきてはいけない命なんてないと思えるようになりました。

著者であるマーサさんは、羊水検査でお腹の赤ちゃんに障がいがあるとわかった時、どんな気持ちで出産を決意したのでしょうか。もし、私が同じ立場だったら、どうしたでしょう。産んでも産まなくても、きっと私は後悔するのではないのでしょうか。マーサさんのようにダウン症の子が産まれたら、ずっと面倒を見なくてはなりません。他の子どもと比べ発達や成長も遅く、育てていてもきつと不安で「産まなければ良かった。」と思うことでしょうか。でも、もし産まなかったとしても、中絶は一つの命を殺したことになる。自分を責めるに違いありません。産むという道も、産まないという道も、どちらにも「後悔」に繋がっています。でも、私は、マーサさんと同じ、産むことを選びたいと思います。

私には障がいを持った姉がいます。ダウン症よりも重い障がい。話すことも歩くことも、字を書くことも読むことも見ることもできません。介護がなければ何もできないのです。私も時々世話をしますが、姉は言葉を話せないのです。その意思もわかりません。ご飯もペースト状にして食べさせ、お茶も少しずつ飲ませます。ごくりと飲んでくれ



るのは最初のうちで直(じき)に出してしまいます。でも、脱水症状になるといけないので、時間をかけてゆっくり飲ませてあげます。おいしそうに飲んでくれると、疲れも一気に吹き飛んでしまいます。姉の笑顔を見れば、元気が湧いてきます。姉が障がい者だろうが何だろうが私には関係ありません。姉が大好きです。

そんな私でも、小学校の頃は、なぜ姉が辛い目に遭わねばならないのかと、よく泣いていました。そして、姉と二人、買い物したり料理したり、散歩したり、内緒話したり…そんな生活を想像しました。姉妹げんかにも憧れました。そうして、寂しい気持ちになりました。一見、当たり前の生活だけど、当たり前にあることではありません。家族と過ごす時間は、かけがえのないものです。

印象深い出産の場面は、マーサさんにとって、赤ちゃん(アダム)との喜びの対面であり、ダウン症という厳しい現実を受け止めることでもあったと思います。

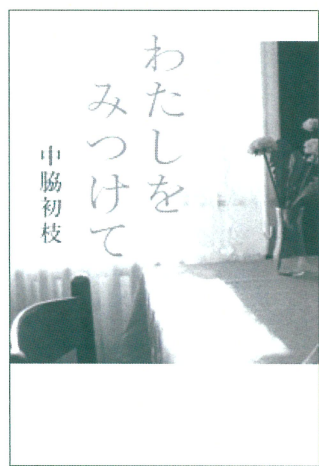
ダウン症の人は、明るく穏やかな人が多く、周りの人を和ませてくれます。私は、障がいのある子どもたちがいる施設に行ったことがあります。そこは笑顔で溢れていますが、なぜか、それぞれに幸せそうでした。その笑顔を見ているうちに、きっと、その子らの母親たちは、「産んで良かった。」と思っていると思えてきました。そして、そうあって欲しいと思いました。施設の子どもの笑顔、この本の表紙にあるマーサさんとアダムくんの笑顔、そして姉の笑顔を見ると、生まれてきてはいけない命はないのだと強く思いました。

『あなたを産んでよかった』マーサ・ベック 著 扶桑社



### 「進むべき道」

渡邊 真綾 (飯南高校)



『わたしをみつめて』中脇初枝 著、ポプラ社

夏休み前に、母から一冊の小説を手渡された。主人公は看護師。自分はいつも一人だと心を閉ざし、黙々と仕事を続ける。しかし、新しい看護師長の赴任により、患者との向き合い方や看護師としてプロ意識を持つことの大切さなど多くのことを学び、頑なだった心を徐々に開いていく。私の将来の夢も、看護師になることだ。小さい頃の私は病弱で、季節ごとに入院を繰り返していた。入院すると、看護師さんが仕事の忙しい母に代わって話を聞いてくれたり、励ましてくれたりした。そんな看護師の方々に恩返しをしたい、病気で苦しむ人々を支えたいと、小さい頃から将来の夢を看護師におき、今もその目標達成の為に頑張っている。

「真綾は笑顔が可愛いけえのお。ええ看護師さんになれるで。」そういって、私の夢を応援してくれた祖父。しかしその祖父は今、糖尿病とパーキンソン病、前立腺がんから全身に転移したがんを治療するため入院している。祖父は急激に体重が減少し、やせ細ってしまった。最近ではほとんど食事も摂れなくなり、大好きなアイスクリームも少しずつしか食べることができない。ほんの数ヶ月前まで、元気に庭の松を手入れし、草刈りをしていたのが信じられないほどだ。身体中の痛みに必死で耐える祖父の姿を目にする度に、病気の恐ろしさを痛切に感じる。

実際、自分が看護師になることで、手術に立ち会ったり、祖父のように痛みで苦しむ患者さんを支え、励ますことができるのか不安だ。中途半端な気持ちでできる仕事だとは思っていない。本の中でも看護師長は言う。

「看護師は、ひとたび病院に入ったらず看護師という仮面をかぶらなくてはけません。そして、看護師は患者のためにいます。迷ったら、患者のためになるかどうか、それだけ考えて。そうすれば、答えはできます。」まだ高校生の私は、患者さんに何かをすることはできないが、相手を友人や先輩、家族に置き換えて、自分が何をすれば一番喜ばれるのか、どうすれば大切な人を助けられることができるのかを、日頃から考えていたいと思う。

本の後半で、辞任する看護師長の一言が今の私にとって最高の贈りものとなった。それは、「正しい答えを探す必要はありません。答えはどこかに転がっていたりはしません。答えはいつも、あなたがたの中にあります。」という言葉。

高校生活を送る中で私は、様々な壁にぶつかっている。勉強だけでなく、部活や友人関係など、本当に様々な壁を乗り越えるために、答えを出すのはいつも自分自身だった。それでも失敗をすることはある。これから、間違った判断をしようことがあるかもしれない。しかし私には、友達や家族がいる。周りで私を支えてくれていてる人たちがいる。きっと壁が現れても、初心に立ち戻って、新しい一歩を踏み出していけると思う。私は一人ぼっちではないのだから。

『わたしをみつめて』中脇初枝 著 ポプラ社





# 平成二十七年度 読書推進運動功労者の表彰

公益社団法人読書推進運動協議会から、「つくし会」が全国優良読書グループとして表彰されました。

## ◆つくし会（雲南市）

代表者 石飛 友江

昭和五十一年、木次地区婦人会の活動のひとつとして「つくし会」が発足して三十九年。現在会員は六名。木次図書館の研修室で月1回の読書会を開催。

振り返ってみると、元国語教師に七年間も講師を務めていただき經典の解説や歌舞伎の解説など多くの講義を受けたこと、また先輩諸姉からは戦時下における島根の様子を聞いたこと、文化協会の先生と「雲南の歴史探訪」をしたことなど貴重な体験をしました。昨年は読んだ本が映像化され鑑賞しましたが「やはり本を読んで想像力を膨らましたほうがいいね」と本に軍配が上がりました。

「つくし会」の存在は私たちの活力源になっています。

島根県図書館協会読書推進運動協議会部会では、読書推進運動のために尽くし、功績が顕著な団体及び個人を毎年表彰しています。今年は五団体を表彰しました。

## ◆おはなしだんだん（出雲市）

代表者 青木 典子

「おはなしだんだん」は、大社町立図書館（当時）開館時（平成十二年）から継続的に開催した「語り手養成講座」の平成十六年度受講生の有志により、平成十七年四月に結成されました。グループ発足に当たっては、発足時の主宰である伊藤孝子氏が一念発起し、講座終了後の受講者に声

を掛け、当該ボランティアグループの立ち上げに大きく寄与されました。「おはなしだんだん」の名前は、「おはなしを聞いてくれてありがとう」という気持ちをこめた出雲弁の「だんだん」と「だんだんに会員の皆のお話の上達していきますように」という思いをこめてつけられました。

主な活動として、現在は大社図書館でのおはなし会（月2回）のほか、大社地域を中心に、出雲市内の多くの小学校・幼稚園・保育所へ、お話を届ける活動を続けられています。

## ◆おはなしベンジャミン（出雲市）

代表者 糸賀 真由美

斐川町立図書館（当時）では、平成十五年の開館と同時に、ストーリーテリングボランティアを公募しました。この時に誕生した「おはなしベンジャミン」により、子どもたちへ素話を届ける活動がスタートしました。

「おはなしベンジャミン」の名前は、図書館のシンボルツリーであるベンジャミンの木にちなんでつけられたものです。

主な活動として、第三土曜日に「ひかわ図書館 おはなしのへや」を会場に、ストーリーテリングを行っています。また、毎年開催される「ひかわ図書館まつり」の催しのひとつとして、ストーリーテリングを実施しています。また、「夏の夜のおはなし会」を「おはなしパレット」と合同で開催して、夏の夜にふさわしいお話のストーリーテリングを行っています。

## ◆おはなしボランティア夢風船（出雲市）

代表者 大賀美 弘子

斐川町立図書館（当時）では、平成十五年の開館と同時に、読み聞かせボランティアを公募しました。この時に「夢風船」が誕生し、子どもたちへの継続的な読み聞かせ活動がスタートしました。

主な活動として、第三を除く毎土曜日に、図書館職員と共に、絵本や紙芝居の読み聞かせを

行っています。また、年二回の特別版（クリスマスおはなし会）、ひかわ図書館まつりの催しのひとつとしての「夢風船おはなし会」を開催し、ひかわ図書館の恒例行事となっています。

## ◆ダンボの会（大田市）

代表者 山崎 一功

「ダンボの会」は、平成十一年に、地元の大田市立久手小学校において読み聞かせを始めました。現在では、大田市立久手幼稚園、久手保育園においても読み聞かせを行っています。

久手小学校、久手幼稚園においては週一回、久手保育園においては月二回のペースで、熱心に、また、細やかな活動をしています。

## ◆おはなしビーンズ（大田市）

代表者 辻 まゆみ

「おはなしビーンズ」は、永年にわたり、読み聞かせを中心とした読書推進活動を行っています。

大田市立五十猛小学校での読み聞かせは元より、地元の五十猛まちづくりセンターと協力しながら、敬老会や子ども会において昔語りをしたり、障がい者施設において人形劇などを催したりと、幅広い活動をしています。

## 編集後記

皆さんは「プリオバトル」という言葉を耳にされたことがありますか。プリオバトルは、お気に入りの本を紹介し合うゲームで、知的書評合戦とも言われています。小学生から大人まで、だれでもできる新しい本の楽しみ方です。そこで今年度の読書普及研修会では、プリオバトルについての研修を行います。小学校・中学校・高校・大学・図書館・書店など、様々な場所でプリオバトルの輪が広がることを願っています。

（編集員一同）